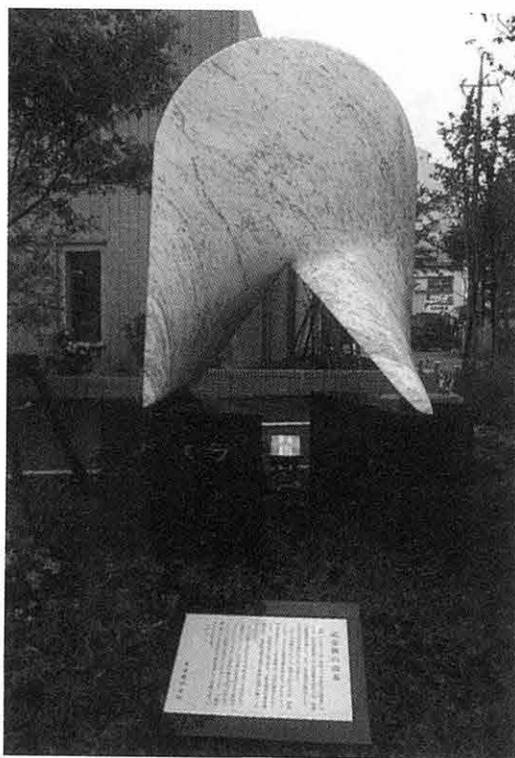


平和を願って



公民館跡地記念碑「オーロラ」(瀧 徹氏作)

涙……涙……涙

●善福寺三丁目

安藤 千枝

(昭和四三年生まれ)

(一) 大本営発表

昭和一六年一二月八日朝、主人は会社へ長男(M五歳)は幼稚園へ行き、私は長女(Y子三歳)を相手に次女(E子0歳)にオッパイを飲ませていた。ラジオの臨時ニュース「大本営発表」今未明我帝国海軍は南太平洋上において戦闘状態に入れりである。その後も、発表はいつも「敵艦何隻撃沈」「敵機何機撃墜」「我が方の損害軽微なり」である。

(二) 出征兵士の歌

「勝つて来るぞと勇ましく」日の丸の小旗がくばられ、「国防婦人会」と書いたタスキを白い割烹着の上にかけたおばさんたちに、送られて出征して行く若者。警報はだんだん頻繁になり、私たちはもんぺをはき、防空演習でバケツリレーやブロック塀の上を歩く練習をしたり、火叩ひたたきは常に濡して置かないなど。

(三) 防空壕

子供たちは防空頭巾をかけて遊んでいる。警戒警報のサイレンになると、「ホラ、お兄ちゃん、早く防空壕の前に行きなさい」とせっかく楽しく遊んでいる子供たちをついヒステリックな声で叱ってしまったこと、可哀想な事だったと悔まれます。

(四) 国民学校

お兄ちゃんがお弁当を持って行く日の父兄参観。小さなお弁当箱の前に、皆で手を合せて「兵隊さんのおかげです頂きまーす」とおじぎをして食べ始める子供たち。だんだん食糧が窮屈になり、台湾人の家に「干バナナ」を分けてもらいに行くようになった。

(五) 風 雲 急

空襲警報が頻繁になって来たある日、Kという軍のえらい方が「我が軍は今、引寄せ戦を行っている。引寄せておいて大東にまるめこむようにする戦法である。今に神風が吹くの

で心配ない」とのこと。皆で半信半疑で聞いていた。

(六) 煙幕を張れ

警戒警報のサイレンがなると、煙幕を張れ、煙幕を張れと防空団の人の声が響く。すると皆は、食糧にするためのサツマ芋の蔓を、惜しげもなく引き抜いて来て、燃やし始める。敵機から見えなくするためとのこと。生でない煙が出ないので、急に草刈も間に合わず、芋蔓という事になる。「どう考えてみても、敵機からは単なる焚火としか見えないうでしよう」と思いながらも、その時は皆夢中であちこちで燃やした。

(七) 召集令

引寄せ戦か何か知りませんが、ますます風雲急となり、あちこちに召集令状（赤紙）が来た。でも前のように旗を振って送るといふことはなく、こっそりとどこへ行かされるのかわからない召集でした。ついに我が家にも昭和十九年七月に主人にその赤紙が来た。日ごろからの覚悟で、冷静にお受けすることは出来ましたが、しばらくして涙が込みあげて来てしまい、どうすることも出来ませんでした。でも、幸いというべきか？ 会社が軍需工場になっていたという事で、間もなく、召集解除の報が届き、お錢別をお返しして歩いたことを思い出します。

(八) 疎開

会社で「ひちと」という田舎に疎開することになった。畳をあげ、床下に穴を掘り、大切と称するものを埋め、最小限の荷物をまとめ、会社で造った細長い仮設住宅に入り、主人たちは会社のトラックで国防服にゲートル巻きのスタイルで通勤ということになった。台湾人の売りに来る魚や野菜でホツとする間もなく、基隆の家の山手の防空壕は、直撃でついに我が家は全焼してしまった。最後に入った風呂の白いタイルに水が入ったまま焼残っていたのが何ともいえない悲しさでした。もし疎開していなかったら、私たちの今日はなかったことでしょう。

(九) 終戦の日

昭和二〇年八月一日、例によって、会社のトラックが来て、皆で出勤してしばらくして、トラックが帰って来た。入口にドッカーリと腰をおろし、日本の敗戦を知らされ、皆言葉もなく、気が抜けてしまった一瞬でした。

(十) 日の丸のパンツ

敗戦で今まで野菜を売りに来ていた台湾人の態度がごろつと変わり、日の丸の旗で造ったパンツをはいて来たのには驚きました。会社は接収されてしまい、主人は体をこわし、静養しなければならぬ体になってしまい、台湾人は技術系の社員は日本には帰さないといつて、主人が休んでいる所まで来て、こまっつてしまいました。会社の上司の方の御厚意で一

年先に帰して頂けることとなり感謝致しました。

(㉒) 帰 国

結婚指輪から、蚊張の吊手までも、供出させられ、大したものは何もありません。定められたお金が一人一〇〇〇円、五人で五〇〇〇円、荷物は一人一個、国民学校に集結して、貨物船の底に「ザコ寝」で基隆港を後にした。食事は、キャベツにお米が入ったオジヤを一パイ。船の甲板の夜警の番が来ると、主人は休養させておかなければなりませんので、私は主人の帽子にコートで男装してN隊長と廻ったり、内地に着けば母も弟たちもいると、いつも「私が頑張らなくては!!」と自分をはげましつづけて、いよいよ名古屋港の岸壁!! 上陸の一步を踏み出した瞬間、私は思わず「サア内地の土よ!!」と大声で叫んでしまいました。途中持物の検査があり、体中をトントン叩き、ポケットまでも。後で気が付いたのですが、五人分の五〇〇〇円が、四〇〇〇円になっていたのには驚きました。今では一〇〇〇円なんて子供でも問題にしないようですが、あのころの一〇〇〇円は貴い!!

(㉓) 我が家の再生記念日

四月一〇日は、再生記念日にして当時を偲びます。名古屋港から、神奈川の実家まで、電報も電話も通じないので、母に知らせることも出来ず、汽車に乗り〇駅に着いた。大きな桜の木が無事でハラハラと散りかかって来た。私鉄に乗りか

えた。終点駅に「負けるも葉だ目が覚めた」と大文字の看板が立っていたのが、印象的でした。家には二人の弟が沖繩と上海から、突然帰ったばかりということで、涙、涙、涙、でました。ひとまずここで主人の体の回復に専念することに致しました。

(㉔) 本社出勤

物資不足は続いていましたが、母や弟たちの温かさにも恵まれて、主人も回復し上司の御厚意で本社出勤となり、杉並区のお世話になっております。

(㉕) 平和っていーナー

この物資溢れる時代、物を捨てないと軽蔑され、捨てるが美徳の毎日、これでよいのかしら? 食糧難時代の子育てを偲びつつも、若人たちの熱中するスポーツを見て「ああ平和っていーナー」こんな豊富な時代に、もう一度子育てを試してみたいナーと思う今日このごろです。

区民の皆様へ御願ひ

一 終戦後一ケ年余を経過致しましたこの一ケ年を願ひますと幾多の気の毒な戦争犠牲者がありますが、その中でも今非常にお気の毒と思はれますのは遠い海外の各地から大変な御苦心をして引揚げられた方々だと思ひます。この方等は一人三十疋といふ裸同様の姿で帰国して住むに家なく働くに職がなく、親族知人の宅に遠慮しながら心細ひ同居生活をして居られる方達で、今本区には約二千五百世帯一万人余居られます。

この気の毒な引揚者が当面してお困りになり心配して居られることはこの寒さに向ひ寝具のことであります。区役所におきましてもこの入手に色々と奔走致して居りますが現今の資材難では仲々思ふ様になりません。そこで皆様に御願ひ致しますことは皆様の御家庭から蒲團でも座蒲團でも一枚御寄附を御願ひ致しまして引揚者の御家庭へ御分け致し度と思ふのであります。

何卒同じ区に住んで居られる引揚者の方々に御同情下さいまして御無理とは思ひますが同胞愛に訴へて御願ひ致します。

△この蒐集につきましては町会長さん、町会役員さん、隣組長さんは特別の御尽力を御願ひ致します。

△蒐集方法

隣組一括町会事務所へ届けること

町会事務所へは区役所から受取りに行きます

△蒐集日 十月二十日

区民各位

杉並区長 高橋 寛

私の戦争体験記

●和泉一丁目

梅田 恒吉

(明治四〇年生まれ)

大正一二年の地震も体験しました。大空襲は杉並では昭和二〇年五月二十五日でしたので、今日はこの辺に来るよと言うので女房に子供と私の実家へ行かせました。

私の実家の甥子のKという人が日本空軍に勤務していて、敵のB29を待ち構えていました。中島飛行場を攻撃に来たB29に体当たりして自分は落下傘で中野へ無事降りました。B29は東京湾へ沈ませました。軍より感状を貰いました。東京は火の海となり、親類を探しに自転車で行きましたが、神田まで行き上野へ逃げたとのこと。上野へ行ったら自転車にも乗れない程人や車で込み合っていました。大勢の方々が食べる物もなく西瓜すいかの焼けたのを食べており、数え切れない焼死体がありました。小石川まで来たときに自転車がパンクしたため歩くようになりました。新宿まで来てパンクを直してやれやれと帰宅しました。

私の家は焼夷弾の直撃は免れましたので焼残り、私一人家に残っていましたが、段々火が近づいてきており逃げるより仕方がないので、自転車に柱時計をのせて木の下まで行きま

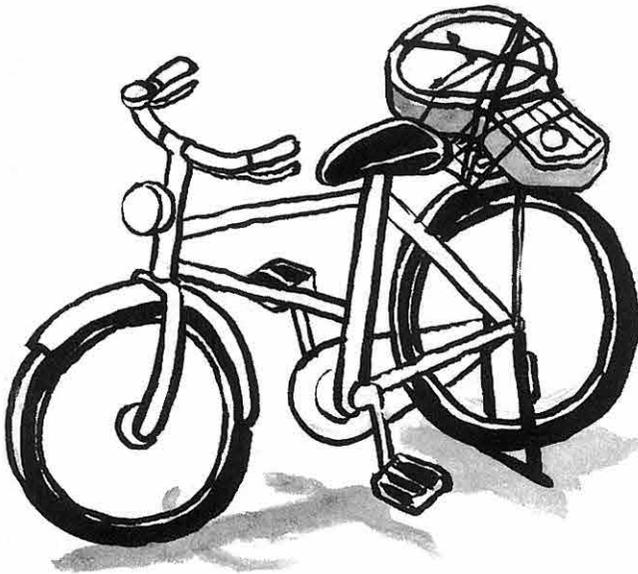
したが、煙のため逃げられません。仕方なくそこへ置いて、前の水道管の中を通って逃げました。管の切れ目まで行くとは非常に深いので、泳いで渡り上ると、着物が水をかぶり寒いので、近所の家の焼けている家で乾かし、実家へ行きました。明朝家へ帰ると、自転車も柱時計も無事でした。夜になると、焼けた電柱で風呂を沸し、近所の人に風呂のサーブिसをしました。子供は疎開先の御代田では栄養失調寸前になっており、お米がないので山の実等を食べておりました。

私の身の上もよもやという召集令状が来しました。北沢の小学校へ集合しました。教室には畳もなく、毛布をかけるだけなので、身体中がいたくて困りました。召集されても衣服も剣もないため出発出来ず、食器もなく竹を切って食器にしました。飯をたく用具もないので、上官の命により、川口まで行き、大きい釜を買付けて来しました。

いよいよ出発になりました。しかし、服は着たが帯革たひらがなく、剣も小隊に三本でサヤがなく、竹で造りました。通信部隊というので自動車の運転かと思いましたが、部隊には身体

の丈夫な人がいないので、小田原から大船まで作業部隊に必要な長い電柱をトラックに積んで運搬をしました。

その後淵野辺へ移動しました。古い旅館で、蚤と虱で夜も寝付かれませんでした。その後横川へ移動しました。毎日大本営に通ずる電話線を地下へ埋める穴掘りを、一日何メートルと決められて穴掘りをしました。そのうち八月一五日、敗戦の詔勅が下り、穴掘りを中止しました。そこで部隊を解除してしまいました。



戦中・戦後の子供の目

●久我山五丁目

庄司 芳昭

(昭和十一年生まれ)

終戦近くの小学生は、給食に蒸パンをいただいた。警戒警報が発令されると、急いでパンをいただいで走って自宅へ帰った。時々、途中の共同墓地に隠れてパンをたべた。高井戸第二小学校より久我山駅まで五分で走った。訓練の時、先生が駅前立って「訓練開始よりただ今、五分」と知らせてくれた。

高井戸第二小学校の周囲に一トン爆弾が四弾投下された。学校南側のM先生の庭に落ちたため、直径一五メートルの穴が開いて松の木が根付のまま屋根の上に吹き飛んでしまった。一五メートル径の輪が赤土の色でしばらく消えなかった。その時、父は高井戸第二小学校の二階の屋根の上で、警防団として旗を振って空襲を住民に知らせていた。

学校の西側へB29の飛行機が落ちて、新しい家を潰してしまった。乗員は久我山の共同墓地に埋葬された。終戦後、急ごしらえの木の十字架が立てられた。

その数日後、米軍のMPがジープに乗って共同墓地へ来た。学校帰りだったので、大人と大人の間をぬって前へ出て、米

兵の墓を見た。

ズック靴(運動靴)は配給で少なかったので大切にした。配給の時は履き古しの靴とお金を出さないと新しい靴はもらえなかった。雨が降ると靴が濡れるので、靴をぬいで跣はだしで学校より帰って来た。道路はガラス針などはおちていなくて、安全に歩けた。

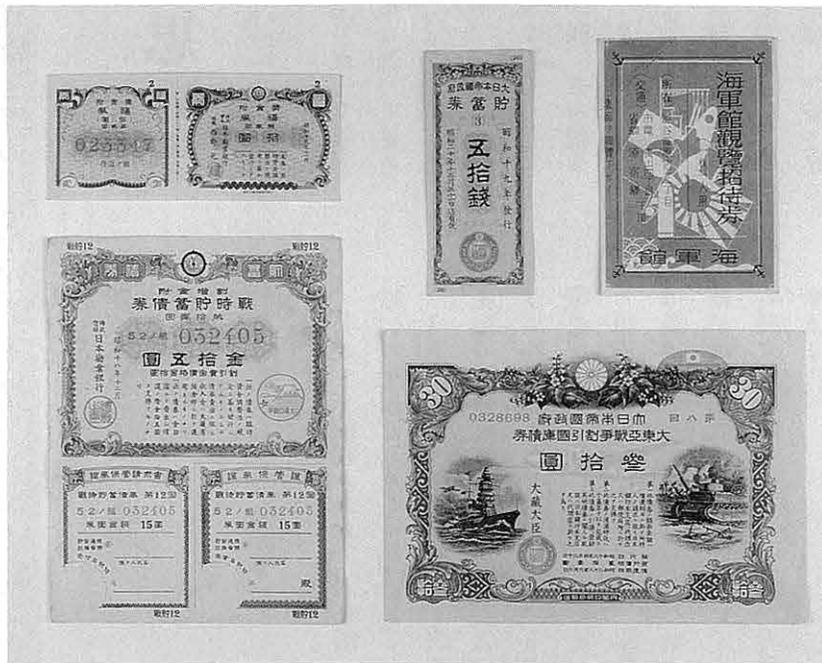
久我山街道と井ノ頭線の踏切で日本無線の会社のバスが電車と事故を起こした。踏切際の八百屋(今の毎日新聞)で配給の順番待ちをした私は、ドーンと大きな音で何がなんだか分からなかった。母がとんで来て、手で私の目を押さえて家の奥へ連れてってくれ、そこを動かなくなと言われた。後で私の家の砂場へバスの前輪タイヤが飛込んだ。戦時訓練をしている大人が即、救助活動をした。私の家の雨戸を外して、負傷者を乗せて久我山病院へ運んだ。救急車は無かった。死人はコンクリートの土間の上へ並べられた。

戦後、高射砲の葉はききょうようより線香のような棒状の爆薬を取り出し、端に火を付けて遊んだ。ねずみ花火のように空中を

飛んできれいだった。

小銃の弾を土に埋め信管を釘と金槌で打って遊んだ。大きな音がして、田で仕事をしている大人が振り返った。

弾は地下へ三〇センチ位深く打ち込まれるので、掘り出すのが大変だった。熱いので注意して掘った。



(右上)海軍館観覧招待券 (中上)昭和19年発行貯蓄券 50銭
 (左上)臨時資金調整法の規定に基づいて発行された福券
 (右下)大東亜戦争割引国庫債券 (左下)戦時貯蓄債券

〈提供 清水錦子さん〉

私の戦中・東京の思い出

●上井草二丁目

鈴木 光雄

(大正一五年生まれ)

私は当年六五歳の男性である。大正一五年生まれ、文字どおり、昭和とともに生まれ生きている人生、振り返って見ると、長いようでもあり短い。東北は山形県の市内出身である。

東京とのかかわりは割合と古く、昭和一四年、一四歳で上京して日本橋へ。家業没落による。昭和エレジーのようなスタートで、出版社の住込丁稚社員となる。その後、日中戦争は太平洋戦争に拡大し、A、B、C、D(米、英、中、蘭)の大国相手の大戦になり、次第に物資は欠乏。東京の生活は、昭和一六年の太平洋戦争突入とともに物資の統制による配給制度を施し、更に国家総動員法を発令して、勤儉、節約、物資増産の政策の強行となり、次第に国民の生活は、物資不足の欠乏による耐乏生活になって行った。

昭和一二年に始まった日中戦争のころは、日本軍は正に連戦連勝で勝ち誇り、中国の三分の一を一年の間に席捲する猛攻撃で首都・南京、北都・北平(北京)等、中国の主要都市を占領し、日本国内では連日、連夜のように、昼は旗行列で日本軍を歓迎し、夜は提灯行列や花電車等で酔い痴れた。

しかし、昭和一六年、連合(四国)を相手としての世界戦への突入で、たちまちにして、戦況は逆転し、次第に国内には不安感や不信感が募り、政府の不認識をいふかる風潮に変わって行きました。新聞、ラジオのニュースは非常にあいまいな報道となり、勝っているのか、負けているのか不明な報道が多くなり、玉砕とか転進とかの文言が多発するニュース報道になって行きました。即ち、玉砕は全滅であり、転進は退却である事がだんだんわかって来たのです。つまり、連敗に次ぐ連敗の敗北戦に成っていたのである。すでに国内での我々国民の生活は、欠乏から疲弊の一步手前にまで及んで来ました。

昭和一八年には、何度か東京や大阪、東北、九州等にも、米軍飛行機が飛来するようになりました。婦人たちは国防婦人会、愛国婦人会等を結成して防空演習を行い、国内に残された年長の男性は、在郷軍人会等を結成して国内の物資不足、軍備不足にそなえ、若い子女は軍需工場への動員等、男性職場の人手不足を埋めるようになっていき、へ進め一億火の玉

だ。〈欲しがりません勝つまでは〉等と、子供たちも、都会から食糧豊富な田舎へ疎開という方針で、家や親元を離れて団体生活に入るように成って行きました。

私の、東京日本橋の出版社も戦時統制の圧迫で材料制限等により解散となり、私も食べ盛りの一八歳ですから、田舎の生活の方が食糧的にも有利と考え、山形に帰る事にしました。

東京では、すでにお米は粥等、穀類は不足していましたが、山形の田舎は未だ余裕があり、白い御飯（銀シャリ等といった）が食べられました。山形市の山形県木材会社の社員になり、未だ物資の欠乏が少ない山形での、昭和一八年から同一九年までの一年間は大変幸せであったと思う。しかし、昭和一九年には、東京や大阪等の引越の人々が山形にも流れて来るようになり、次第に山形も物資に影響が出て来ました。

昭和二〇年五月、私も一年繰上げ兵役で陸軍二等兵として仙台の青葉連隊に入隊する事になり、仙台に入りました。仙台の青葉師団に入隊して三日目に米軍による大空襲が始まり、仙台市は壊滅。もちろん我々の青葉師団も丸焼けで、寝具を担いで仙台市近郊のお寺や学校に駐屯、仮兵舎住いとなりました。

仙台に入った時から青葉師団には、すでに兵員一人一人に配る銃も無くて、本土決戦に備えて本気で毎日竹槍の訓練をしていたのですから、口には出さずとも、お互い皆、本土決戦なら死しかないと考えたし、若しかしたら負けるのではないかと誰もが心で思っていたものでした。仙台の近郊のお寺

に駐屯した我々兵隊たちは、近隣の農家の手伝いで食糧を調達する有様で、何とも、後で考えれば噴飯ものでした。

そんな訳で昭和二〇年八月一五日終戦となり、私は直ぐ山形に帰って働かねばならなかったのですが、すでに山形にも米軍の先遣隊が来ていましたので、米進駐軍の連絡員に就職したのでした。というのも、本来私は英語が得意だったのでそれを何とか生かした仕事をと念願していたので、その意味ではもともと早く米軍と接触し、英語を覚えた一人かとも今も誇りに思っています。その後、杉並区に移り、静かな第二の人生を送っております。杉並の自然が何とも言えぬほどたまらなく魅力的です。